

## 17年度浩志会研究会員活動テーマについて

代表幹事 神田 真人

(財務省大臣官房秘書課企画官)

17年度研究会統一テーマについては、現下の諸問題の解決には彌縫策では間に合わず、結局、国家百年の計である「ひと」の再構築しかないのではないかという仮説、及び、浩志会の設立趣旨である人材育成という目的意識に鑑み、

### ◎ 「世代をどう継承・発展していくのか：ひとの育て方」

と設定し、そのもとで、

- ① 「こども」 (初等中等教育、家庭等) ⇒ 第1フォーラム、
- ② 「キャンパス」 (大学等) ⇒ 第2フォーラム
- ③ 「コミュニティー」 (職場、地域社会等) ⇒ 第3フォーラム
- ④ 「技と芸」 (スポーツ、芸術等) ⇒ 第4フォーラム

の4つのフォーラム課題に分けて、研究を展開してまいりたいと存じます。

なお、それぞれのテーマを貫く切り口として、「ジャーナリズム」や「IT」等がありますが、これは、要すれば、各フォーラムで扱って頂いて結構です。

ところで、活動テーマは抽象的なため、各フォーラムとも、最初の土俵設定の際に、「何をやれというのか」と悩まれ(代表幹事を指弾?す)ることが例年の現象となっております。そこで、各フォーラムにおける議論の一助とすべく、小職の問題意識を下記の通り、多少、具体的に開陳申し上げますので、参考にして頂ければ幸甚です。

推敲もなく、様々な論点を思い付くままに乱筆したにすぎないので、勿論、これに捕われず、自由闊達に議論して頂ければと存じます。また、意見にわたる部分は、浩志会や財務省とは無関係の、個人的見解であることもお断りしておきます。

固より答の出ない難題であるところ、全員参加の浩志会、全会員が「その担当領域、利害得失を越えて自由に意見交換を行う」ことに主眼があり、その議論のプロセスにおける「相互啓発と自己研鑽」と、友人形成が重要ですので、是非、積極的なご参加を期待申し上げます。

## 1. [序章]

人類 300 万年の歴史を経て、今日の社会がある。不完全な人間が、歴史の試練を経て、漸く、これまた不完全でありながらも、それなりのところに辿り着いた。世代の継承・発展の弛まぬ努力の結果に他ならない。文字の発明による知識の蓄積も不可欠の要素であったが、結局、その知識の形成、活用を含め、あらゆる意味で後世を巧く育てた存在が、適者生存し、進化を担ってきたともいえよう。

しかしながら、物質文明の発展に比して、精神文明は左程、深化していないのではないのか。社会病理は過去と変わらず、また、現代ならではの、新たな問題も多々、惹起している。我々の悩みは、四千年前の中国、乃至、古代ギリシャ・ローマとあいも変わらず、更に新たな現代病にも患っているかにみえる。

足元をみてみよう。物質主義、拝金主義が社会に蔓延している。ここまで、自然や、時には、他民族、更には次世代の厚生まで搾取して、豊かな生活を享受しながら、不幸と思う人が多い。まさに人倫の分裂態、物象化に伴う自己疎外の自滅として、類の本質を無意識に夢見つつ、彷徨っているのか。また、本来、社会に還元するほどに成功している人が、シビタスを欠如し、極めて利己主義であったり、無責任なパフォーマーに墮落する。社会のことを考えないフリーライダーであっても、ブラウン管の「英雄」として跳梁し、真面目に、公益を考える人々が「暗い」と揶揄されるような社会は、人類史上、極めて奇異であるし、持続可能ではありえない。他方、黄金満籬より一経が当然としても、現代における一経とは、一体、何なのか。価値相対主義が振り翳される中、その定義が悩ましい。

特に我が国、私は世界 60 カ国以上歩いてきたが、残念ながら、我が国ほど、活力、ヴィルチューが衰退していると見えた国は余りない。我が国土において、ニートやフリーターはなぜ、生まれざるを得ず、かつ存在を許されるのか。後世の歴史家は我々の時代精神をどう総括するだろうか。利害得失の打算が徘徊し、テンニエスが期待したゲマインシャフトとゲゼルシャフトの止揚が遠のくばかりにみえる。人口、特に若年人口が激減（既に、昭和 24 年生まれ 270 万人から平成 15 年生まれ 112 万人に）していく我が国は、量的減少を凌駕する質の向上を図らなくてはならない時に何をやっているのか。

社会全体を語らず、各職場の状況としても、官民、産学問わず、マニュアル世代は使えない、と上司達は嘆く。暗記と要領の良いプレゼンだけに長けて、自分で悩まない、考えない、主体性も創造性もない。夢も野心もなく、リスクをミニマイズする、これでは将来の芽は摘まれてしまっている。最早、進化は止まってしまおうのだろうか。

では、このように精神を犠牲にして技術的能力は向上できたのか。OECD の国際調査によれば、2000 年から 2003 年の間に、我が国生徒の読解力は 8 位から 14 位へ、数学的リテラシーは 1 位から 6 位へ低下した。また IEA 調査（1999 年）では、数学や理科が好きである児童の割合が国際的に最低レベル（数学、理科の国際平均はそれぞれ、72%、79%、我が国はそれぞれ 48%、55%）というのも気になるところだ。

そういえば、若者だけでなくトップエンドも危うい。学会は量的管理が厳しくなり、論文が乱造される一方、熟慮を重ねて、同世代人から弾圧されるようなパラダイム転換を唱導するようなことが少なくなったように見える。次世代に残るような芸術作品も、歩留まりが少なくないだろうか。ここまで大量生産される中、何故、古典に頼ら

ざるを得ないことが少なくないのか。

社会的意識の話に戻ると、そもそも、我が同胞は、公益に無関心、無責任である前に、実は、自分の利益にとってさえ賢明でなくなってしまうてはいないか。効用関数が動物のように極めて短期的かつ矮小になっているとしたら大変なことだ。例えば、古今東西、未曾有の財政赤字に直面し、その十分な情報を享受し、恐らく認識しておりながら、危機感がない。仮に、子供のことまで考える、或いは、自分の少しでも先のことまで考える視座があれば、合理的な選択ができているはずである。殆どの先進国はその試練を潜り抜けているというのに。結局、我が国は、市民として社会全体を考える常識的コンヴェンショナル・ウィズダムが再生産されなくなっただけでなく、先を見通す力、自分を守る力さえなくなっているのではないか。ひとごとのように語られる安全保障論だってそうだ。

このような状況について、我が国は宗教心が希薄で、教会といった倫理教育システムがないから仕方ない、海に囲まれていて国境の危機感が乏しいのはやむをえない、といった謂いもある。しかし、我が民族の歴史を振り返れば必ずしもそうではないことは明白だ。

恐らく、一部（GS）のGHQの急進的な理想主義（勿論、故意的な破壊の側面もあっただろうが）のもと、形成された、ある意味で特殊な大衆民主主義に起因するのか。史上、最も平等である美德をもちつつも、共産主義の実験同様、人間の未完成から成就せず、副産物として、大衆が権利を主張しつつ義務から逃避し、あらゆる権威を否定し、リーダーシップを引き摺り下ろし、知識人階級が国家という偉大なフィクションと共に溶解してしまったのではないか。ここまで、即物的、感情的、近視眼的な世論が支配するのは、ワイマール以上の恐ろしさだ。

何がおかしいのか。叫びが聞こえる。政治が悪い。マスコミが馬鹿だ。所詮、その程度の国民なのか。最早、民族の再生産さえ危うい。魂のみならず、物理的な人口においても。このままではカルタゴの如く歴史に消え行こう。

そうかもしれない。私もそう叫びたいときもある。しかし、それは詮無い。政治家を選ぶのは国民。国民を善導すべきは政治家。為政人在、政治家は国民の中から国民によって選ばれ、再選のために国民のポールを気にして生きている存在にすぎない。マスコミの視聴率、販売部数を規定するのは国民。国民に最も影響力があるのは恐らくマスコミ。まさに鶏と卵だ。更に、子供の教育も、今の子供がいずれ親となり教師となり上司となるのだから、一度、しくじったら何世代も難しい。所詮、「子供は父母の行為の映鏡」（スペンサー）なのだ。

この死にいたる病の螺旋階段から脱するために、僕らは何ができるのだろう。犬の遠吠えとならずに。

結局、遠回りだし、教育の再生産性を考えると途方もなく辛い作業だが、「ひと」をあらゆる場面で育てるより他ないのではないか。2500年前の有教無類（衛霊公）の教えに戻るのだ。寺小屋、藩校の意義は周知の事実であるし、East Asian Miracle（世銀）でも、その奇跡の要因の一つに、急速な人的資源の蓄積をあげており、これが、経済成長に適応した広範な技術的人的資本ベースの形成と、より平等な所得分配の好循環に繋がったとしている。我々も初心にかえって、一からやってみないか。

堀悌吉と共に尊敬すべき井上成美は、戦は下手だったし、結局、戦争を止められなかったが、江田島で、教養と自恃の精神、英数とジェントルマンシップを持った若人を多く生み出し、敗戦後に備えた。我々にも、局地戦かもしれないが、それぞれの部

署でひとを育てることにおいて何かできるのではないか。

どうすれば、人類を、或いは、より狭く、我が国民を、あらゆる意味でより良い存在に、少なくとも持続可能な存在にできるのか。教学為先としても、実際にどうやればよいのか。考えてみたい。

翻って、浩志会は、設立目的に、「総合的かつ国際的視野に立って日本の将来を担う官民の人材の資質向上及び相互理解の促進を図り、我が国の社会の発展と国際社会への一層の貢献を図る」と高らかに謳っている。何たる先見の明か。将に我らの責務ではないか。

蓋し、我が国を背負う官民の諸組織から、しっかり選任された我が会員は、将来、それぞれの戦場で我が国を背負うであろう。我が会員ひとりひとりがそれぞれの持ち場で努力すれば、平均的国民や組織が行動するより、ずっとレバレッジが効こう。これは傲慢ではなく、ノブレス・オブリージュである。謙虚な気持ちを忘れてはならないが、誇りをもって、世代の発展・継承の礎とならん。

このような一般的認識のもと、永遠の課題を、必ずしも論理的ではないが、敢えて、4つの土俵に無理やり切り分けて、各フォーラムで徹底的に研究して頂きたい。即ち：

## 2. [第1フォーラム]

◎ 第一に、「こども」。乳幼児から初等中等教育まで。

○ 我々の幼少期には言葉すらなかった「お受験」から、「学級崩壊」、少年犯罪の多発。詰め込みの空回り、学力低下と精神的退廃、カオスの並存は取り付く島もない。中印が10億以上で競争させ、エリート教育に投資しつつ、最後まで、競争を続けさせるような状況下、流石に、無責任な「ゆとり教育」は国民の支持を失いつつあるが、余りに高価な機会費用だった。技術的知識の要請が高まっており、厳しい諸外国並みの強度にしなければ、国際競争力を維持できないのに、円周率3はあんまりではないか。これこそ国民蔑視に他ならない。

学校の語源が暇であることは知られているが、これは労働をしない特権であり、その分、将来の社会への貢献を期待した社会の投資であることを忘れていないか。また、リベラリズムに立っても、デューイが唱えた学校教育の三機能、社会的統合、平等主義、人格的発達、いずれも失敗しているのではないか。

効率と公正の相克は社会科学の永遠の課題であるが、エリート教育問題はその一事象である。パレート、モスカ、ミヘルスに始まる議論を前提とすれば、寧ろ、エリートを、どう公平に生み出し、社会に貢献させる道具にしていくかが大事なのではないのか。イートンなかりせばワーテルローもといわれるが、我々にはイートンがない（今の英国にも本来のイートンはなくなったかもしれないが）。また、エリートを血筋等ではなく能力で抽出していく能力主義は社会的活力の源泉であるが、貧富の格差が拡大する一方、教育費用が嵩む中、社会的流動性が衰退してきたという分析が事実とすれば、新たな競争モデルを模索する必要もでてこよう。

○ より人口に膾炙している問題は愛国心教育である。愛国心というとイデオロギー

性を感じる方には、民族の歴史・文化の継承といった、他国では当然の国民教育と言い換えても良い。戦後教育において、戦前、戦中の反省と初期占領政策の影響から、殆どの国家が自然と重視している愛国心教育や、民族史といったものが軽視乃至忌避された結果、アイデンティティーのない、社会に無責任な国民が輩出され、日本人を再生産できなくなっているという憂いは共感できるのではないか。

教科書問題となると、昨今の中韓との軋轢で皆さんの関心も高まっているはずなので、詳述しないが、イデオロギー的立場を離れても（浩志会は思想団体でも政治結社でも決してなく、自由な親睦団体である）、「うれうべき教科書の問題」（1980年）の残滓は、どの立場であっても、今の日本の現状を総括する際に無視できないのではないか。新渡戸が数少ない国際的認知を受けた日本人であることを否定する人は少ないと思われるが、日教組が教科書の採択基準に、武士道の道徳が発現していないことを挙げていたとすれば、象徴的なことではないか。

誤解なきようにいえば、私自身、日教組の中で社会的意識を尊敬できる先生がおり、中高はマルキストであったし、新保守主義？となった現在、財務省人事という権力の中枢にあっても、絶えず、ロールズの格差原理等を念頭に思考しているので、全否定しているわけでは毛頭ない。

実は、この問題は、そもそも公教育制度の発端に根があるかもしれない、即ち、冒頭、「公教育は国民に対する社会の義務である」と宣言した国民教育の父コンドルセは、教育の機会均等等を推進した国民国家の父でもあるが、公教育の対象を、真理を教授する知育のみとし、宗教的、政治的意見が干渉する訓育を排した。これは、宗教からの国家の独立が自由主義革命の大きな命題であった文脈から理解できないわけではないが、この結果、教会制度等、公教育以外の躰の場が少ない社会において困難が生じたのは、論理的帰結かもしれない。

- もう一つ、子供の教育絡みで紙面を飾ったのは、三位一体改革における義務教育費国庫負担金（17年度予算：2兆1150億円）の扱いである。これは、不幸な議論の展開となってしまったが、教育の普遍性（水準維持）と多様性・競争といった重要な論点を、国民が改めて議論する契機となったともいえる。国と地方の権限争議ではなく、教育論として捉えれば、どのような姿が理想的なのだろうか。
- 最後になるが、家庭も大事、三つ子の魂を形成するから、実は、一番、大切だと思う。養いて教えざるは親の過ち、親の意識と行動が肝である。共稼ぎ、核家族化等で、家庭内教育が難題にぶつかっている。人口減少もあって、女性の社会での役割が期待される一方、少子化は、家庭教育の重要性を高めている。今、幼保問題が規制改革の絡みもあって、大きく取り上げられているが、重要なのは、親が子供とどう接して育てていくかではないか、と思われる。子供をひとり躰けて立派に育てることが、金儲けのための就業よりも遥かに尊くみえるのは私だけだろうか。仕事に感けている小生は既に失格であるが。
- 麻中の蓬同様、「こども」の生育環境がしっかりできれば、不扶而直、展望が開けるし、これに成功しなければ、将来はない。

### 3. [第2フォーラム]

- ◎ 第二に、「キャンパス」。大学、大学院。「キャンパスとラボ」として民間研究機関を明示的に含めても良い。
- 毎日、無数の論文が、学位取得、テニユア維持のために、時には数人にしか読まれないにもかかわらず量産されている。しかし、なかなか、パラダイム転換につながるようなものがでてこないようだ。宇宙論、生命論、最先端の天才達に、中身は判らないながらも魅了されるが、様々な挑戦はあっても、方法論の主体はなおデカルトの要素還元主義のままのように見える。ニュートンのプリンキピア（1687）からアインシュタインの一般相対性理論（1916）まで200年以上、焦ることはないかもしれないが。

大学院が「大人しくエネルギーに欠け、独立心、野心に乏しい者の隠れ家」（ローウェル）という定義は可哀想だが、専門分化が激化する中、より狭い対象を深く探求せざるをえない状況下で、その危険性が高まっているように見える。

特に、我が国の若手学者の友人達は、資金と人材に恵まれた工場型欧米研究室と対峙しつつ、多岐亡羊、蝸壺の学会文化で苦勞の挙句、嘆きが深い。また、英語のジャーナルで闘う自然科学や経済学に比べ、日本語や日本社会の塹壕のある法学や政治学の一部は国際競争に相対的に晒されにくく、鍛えられない、評価されない、という批判も聞こえてくる。

どうすれば、人類の学問の発展に貢献できる学者を育てられるのか。実学と（いい意味での）虚学、真理の追究と実社会へのレレバンス、このバランスをもった明日の学界を作れるのか。
- 教育と研究を担うキャンパスについて、敢えて研究から入った。これは、世代の発展が研究の最先端で見極められる部分があり、学問の徒の育て方が重要であること、大学進学率の高い現在、社会に出て行く若者の最後の教育環境として、教官が尊敬される仕事をしていることが必要であること、更には、教官が教える学生達が、いずれ、親となり教師となり、上司となって次世代を育むからである。ナチス支配からのユダヤ人学者の亡命で衰退するまでドイツが研究の中心だったのは、研究を通じて教育するゼミナールの導入ではないかといわれているが、研究と教育は一体不可分である。
- 大学教育に移ろう。資格志向、大学入学と共に、公務員試験や司法試験の予備校に通う始めるという、我々の学生時代には考えられなかった珍現象。既存のものを疑わず、自分でものを考えず、真理を求めて悩まず、答えがあるのを前提に、数年立ったら使い物にならなくなるものをひたすら暗記する学生が社会に役に立つのか。大学教官も自信を喪失し、受験指導？を始める… 我々、官庁や企業は、大学の生産物のユーザーでもある。どんな人材を期待し、そのために、どんな教育をしてもらおうべきなのか。大学が今ようになったのは、我々が形成している労働市場の責任もあるのではないか。
- 大学側にはそんなことを考える余裕がないようにも見える。国立大学独法化後、マネジメントも資金手当てに奔走。キャンパスのあり方論において、学問の自由、大学の自治に傾斜して、長年、ポポロ事件判決などが、中心的な話題であったかと思いきや、今、極度に、資金的な問題が教授会の議論の中心となってきている。先

般、母校の小宮山総長のお話を拝聴した際も、資金繰りに悩まれているようであった。ハーバードの資産は221億ドル（NACUBO統計）、この方向で勝負するのであれば、気の遠くなる世界である。財政構造改革のもと、公的資金に限界があるとすれば、教育のためのリソースをどうやって供給し、どのように分配すべきなのか、よく考えなくてはならない。（因みに、17年度予算では、国立大学法人運営費・施設費等補助金は1兆2864億円、私立大学等経常費補助は3293億円。）

- 社会ニーズにレレバントな実務への貢献という意味で意義がありつつも、パン学問的技術に傾斜する危険を内在した専門職大学院ブーム（ロースクールだけで74校、定員5800人）も最近の現象だ。高度で特殊な専門性を要する医学部ならともかく、文系で6年も、仮に試験型勉強に埋没していたら、大丈夫だろうか。欧米では、学士が一旦、社会に出て、社会的問題意識を深め、学資を貯めてから、キャリアアップのため大学院に進むことが多いようであるが、我が国はモラトリアム6年貫通組が多いとすれば、同列に論ずべきではない。

他方、国際舞台で見ていて、最も優秀とみられるENAは、戦後できたグランゼコールであり、実はそれほど歴史があるわけではない。未だ間に合う。色々な選択肢を考えてみよう。

- 私のいたオックスフォード、各国の将来を担う留学生に満ち溢れている。母国に戻ったら、皆、要職につき、英国との関係を大切にしている。これが、「植民地支配に対するパターナリズムの偽装」（ハックスレー）であったとしても、英国のCOMMONWEALTHSに対する影響力、国際プレゼンス維持の最大の武器の一つであることは間違いない。

語学やプレステージのハンディがあるとはいえ、残念ながら、我が国大学のそのような機能はまだまだである。中国人の親日派も日本留学生が多かったが、高齢化し、余り続いていない。留学生が増えると、安全保障上、有利なだけでなく、教官、学生の訓練にもなる。国際的な人材を育むには、留学も良いが、留学の受入も極めて効果的だ。我が国のキャンパスが外国人教官、外国人学生で満ち溢れ、仲良く議論し、高めあっている光景を夢見てはどうか。

もう一つ、オックスフォードのシステムについて参考になるとすれば、私は、日本では法学部出身というハンディを負いながら、経済学大学院を修了したが、これは、単に、その贅沢なチュートリアルシステムと、三分の一が脱落するという厳しい規律のお陰だと考えている。チュートリアルはリソースの制約から不可能であろうが、後者の厳しい修了基準は是非、導入すべきだと思う。そこで多くの教官に意見具申しているが、そうすると、学生や父兄、時には内定を打った会社から抗議が来るので、余り手荒なことはできないそうだ。会員の皆さんは製造物責任を問うより、市場に良品が揃う方が良くはないか。

これから、少子化で、定員上、全員が大学に入れるような時代となる。教育水準を維持するのであれば、キャンパスにおけるディシプリンとインセンティブの強化は喫緊の課題に見えないだろうか。

- 最後に、官民学協同の協同と棲み分けが議論され続けている中、企業や独立研究機関における研究もこの範疇にいれてもよい。この場合、「キャンパスとラボ」にTORを変更して差し支えない。

#### 4. [第三フォーラム]

- ◎ 第三に、「コミュニティー」。地域社会と職場。NPOも入れてよい。
- よく日本には宗教観が希薄であり、教会等がないので、社会のアイデンティティや社会奉仕の精神がいきわたらないといわれる。自治会でも押付け合い。社会奉仕に高い価値が置かれていない。能力ある人は共同体に特に貢献することが当然であり、共同体構成員はこの奉仕者に感謝すると共に、それぞれが自分で出来ることを行うという、社会契約が構成されないことが多々、見られる。他方で、若者の震災ボランティアでの活躍、海外青年協力隊の実績等、明るい展望もある。玉石混交かもしれないが、昨今のNPOブームも注目してよい。
- 卑近な話題で恐縮だが、官舎では様々な掃除当番が回ってくる。親子でみんなの庭や廊下を掃除するのは面倒(自分は妻子任せで殆ど貢献していない、反省)だが、微笑ましい光景だ。ここで、社会奉仕を内在化し、お互いの努力のお陰で暮らしていけることを知り、ご近所さんと利害得失を離れた語らいをするのは、社会教育の原点だろう。

様々な文化・教育活動を自治体が展開している。国家が抽象的過ぎて、或いは内在的矛盾が多くて、理解しがたいとすれば、地域社会は程よい社会教育の場なのかもしれない。

この観点からは、米国の民主主義には誤謬も多く、無責任な輸入論には苛立ちを覚えるが、こと教育に関する地域のコミットメントは参考にして良い。まさに、地域が教育のあり方を規定し、良くも悪しくも、地域間競争が成立している。人口流動性が低くなくても、教育と地域社会の好循環が機能している場面がある。勿論、これでまた、パッチワークで、教育水準の維持を無視して、全て地方任せという極論が出てくるのが、日本の困ったところだが。
- 職場での社内教育も「コミュニティー」の範疇で扱いたい。職場が果たしてコミュニティーの内包か、聞いたことがないぞ、と違和感を覚える会員も多いだろう。しかし、人生丸抱えが壊れつつあるとはいえ、人生で最も時間をすごすのが、家庭よりも、職場というのが実態であり、そうだとすれば、最も大事な「共同体」ではないのか。また、職場と家庭、地域社会との両立がキーではないのか。
- 国民、消費者、株主、その厚生を持続可能に極限化するためにも、構成員が幸福な環境を享受するためにも、職場における次世代の育成が欠かせない。
- ところが、工場や船舶といった我が国の根幹の現場で、リストラの影響で、高齢化が進むと共に、若手が育たず、技術の継承も困難といわれる。最早、低賃金と闘う国際競争の中で、邦人雇用、ましてや、徒弟制は経済合理性に合わないということだが、我が国の将来は果たしてこれで大丈夫なのか。農業は既に瀕死の状態といわれたが、大規模化、法人化等で、再起できるかどうかの瀬戸際だ。若者の農業転進が時々、みられるのは希望の灯火かもしれないが。
- 我々、ホワイトカラーの世界でも、人材育成は悩ましい。

どんな人に、どのように育てるべきか。最近、大論争となったが、成果主義は、大事な論点だ。パフォーマンス、庭先を掃きつつ、手柄は独り占めといった個人プレーを排除し、チームプレーと創造性、リスクテイクを属性とする人材をどう育てていけばよいのか。私は、高橋流を地で行っており、「内発的動機付け」を重視し、



「終身コミットメント」を前提に、「給料ではなく次の仕事の内容で報いる」ことを、化石といわれても守りつつ、他方で、新たな労働市場の現実、価値観に配慮し、より中期的な人材育成・キャリアパス、多様性・開放性の強化と共に、信賞必罰、抜擢多用で、インセンティブ充実に努めたい。しかし、他方で、原理主義的な成果主義を唱導される方も少なくない。私見では人事を知らない無責任な見解とみえるが、どちらが、ひとを育て、活用していけるのか。

- 労働市場の流動化と人材育成の関係も難しい。構造改革を進めれば、転職者が増えるのはやむをえない。雇用吸収力を喪失したところから創出したところに流れるし、同部門でも、成功したところに人が集まる。これがなければ市場メカニズムの意味がないわけで、年金ポータブル化等、政府の施策はこれを支援している。しかし、人材育成にはコストがかかり、折角、育てても、回収する前に逃げられては組織はもたない。自ずと、長期的視点に立った人材投資は疎かになってしまうのではないか。また、そのような組織にはコミットできないから、労働者は高給を求めて渡り歩く。若者の「手に職を」という資格志向は、組織への信頼喪失の裏返しであるが、この傾向に拍車をかける。企業にインステチュショナルメモリーが蓄積されず、長期的施策も打ち出しにくくなり、弱体化する。新たな労働市場を前提に、将来を見据えた職場教育をどうするのかは大きな課題ではないか。
- より重要な論点として、職人氣質、プロフェッショナリズムをどう育むかが大切だし、難しいことだと思う。全ての存在に意味があるように、全ての職業に意味がある。職業に貴賤なし、全ての職業人はプロの誇りを持ってより良い職務の執行とその実現のための研鑽に勤しむべし。別に会社人間になれといっているのではない。創造的で積極的な仕事には、幅広い視野と外界の刺激が必要なはずで、寧ろ、職場以外の世界との両立が鍵ではないか。しかし、どの職場でも、なかなか、プロ意識の徹底は難しいそうだ。

## 5. [第4フォーラム]

◎ 第四に、「高度な技と芸」。芸術、スポーツの類。

- 我々ホワイトカラーが恥ずかしくなるほど、国際的競争力が残っているのが、この分野かもしれない。極めて厳しい競争に勝ち抜いて、我が国の代表が日本のプレゼンスを高めてくれている。オリンピックの日の丸に涙するのは伝統だが、大リーグが、ワールドカップが今のような状況になると、誰が想像できただろうか。プロ野球中継は新大陸に乗っ取られたようなもので、虎キチであった私としては複雑な思いでさえある。何人かのスポーツ「あいちゃん」の成功に、うちの子もこんな親孝行に、といった冗談が聞かれることも、その状況を象徴している。
- 他方で、ジュリアードが昔ほど日本人のプレゼンスがなく、英米の大学院同様、中韓の学生が頑張っていること、芸大を出た優秀な芸術家達が、国内市場では職がなく、アルバイトで食いつないでいること、黒澤ほど世界で尊敬される監督がなかなか出てこないこと、漫画も、手塚のような哲学をもった巨匠が余り出てなくなったこと、多々の問題を抱えている。

- 楽は徳の華といわれ、射は仁の道といわれるように、技と芸は人材育成の究極の姿と思う。そして、芸術は長く人生は短し、芸は、本人が死んでも、また、仮に民族が滅んでも、その偉業は歴史に刻まれる。
- また、スポーツは、二律背反として教育思想を悩ませてきた自然的存在としての人間への「自然につく教育」と社会的存在としての人間への「社会による教育」を調和させる意義がある。自分の人生を振り返っても、心身を鍛えてくれたのはサッカー部、水泳部であり、組織の基本を教えてくれたのは少林寺拳法部である。社会を知ったのは草野球かもしれない。しかし、空地が駐車場や住居に化け、時間が塾と電子ゲームに取られる今の青少年は、どこで、厳しい国際社会で生き抜く訓練を受けるのだろうか。
- 国技をどう考えるかという論点もある。柔道が「国際化」したときの伝統との軋轢、限られた芸術振興予算や寄付金を我が国の伝統文化の継承か、世界共有の舞台である洋ものに振り向けるかの選択、こういった苦悩にどう対応するのか。(因みに、17年度予算で、文化芸術の総合的な振興⇒1016億円。豊かなスポーツ環境づくりの推進⇒97億円。)  
 後者の論点で一言すれば、洋楽や洋画において日本人が国際的に成功するためには、逆に、日本人を意識し、その付加価値において西洋人を凌駕する新たな地平が展望できるとすれば、逆説的だが、「日本人」を喪失することは致命的であろう。中村紘子が丸暗記主義と定義した我が国の手法には創造性の限界があるかもしれないが、齋藤秀雄のメソッドが小澤征爾を生んだことも事実のように見える。
- 政府が文化を選んだり干渉するのは価値観に介入することになるので控えるべきかという論点はどうか。確かに、これまで、スターリニズムのみならず、権力が悪用してきた例は多い。他方で、例えば、文化庁の新進芸術家海外留学制度で、佐藤しのぶ(声楽)、森下洋子(バレエ)、野田秀樹(演出)、野村萬斎(狂言師)、鴻上尚史(演出)といった巨人が派遣されてきたのをみると、国の支援にも意味があるように見える。
- 機会均等、発射台の問題もある。フィギュアスケートのように費用がかかると、小さいときから投資する余裕が親になれば参加できないという世界と、我々の幼少期の草野球、アフリカや南米の草サッカーのように裾野を広げて、大きな母集団で競争させる世界があるという見方もある。  
 芸術については、そもそも、過去の栄光は、貴族がパトロンとして雇用市場を作っていたから出来たのであって、平等な民主主義では無理だという議論もある。2世も増えている。  
 貧富の格差と技と芸の関係はどう考えたら良いのだろうか。
- とまれ、美意識の根本が感情移入であり(リップス)、美は利害の関心なきところに成立(カント)するとすれば、精神の健全さを育む教育としても重要ではないか。
- なお、ノーベル賞や、歴史を変える発明といった偉業は、第二分野のキャンパス(・ラボ)に整理してあるが、天才教育という観点から、この範疇でも研究しても良い。科学も神の美に憧れ、辿り着かないと知りつつ、永遠にその芸を追い求める天才達の道ではないか。

## 6. [その他]

- ◎ 第五に、個別フォーラムに属さないその他の切り口として、ジャーナリズム等。
- どのフォーラムにも固有には位置づけることが困難であるが、場合によっては、義務教育より「ひと」作りに影響力のある存在として、ジャーナリズムがある。  
思想の自由市場（キームズ判事）は、社会の健全な発展のために、クリティカルに重要であることは言を俟たない。しかし、視聴率、販売部数で競いながら生きていかざるを得ない存在は、大衆民主主義を前提にすると、即物的、感覚的、感傷的たらざるをえないことがあり、限界がある。マスコミの質と国民の質は、先に触れた鶏と卵だ。また、かなり批判から守られた状況は、独善、誤謬の隠蔽、無責任に陥るリスクを孕む。  
諸外国であれば、メディア間の相互批判と規律がある程度、維持されているが、我が国はどうか。最近のNHKと朝日の論争は興味深い研究対象かもしれない。
- 技術革新も諸刃の剣。即物的に認知できる情報を伝える映像メディアの普及は、大衆を擬似環境（リップマン）に閉じ込めるとともに、想像力の発達を阻害しかねない。IT技術の発達でリアルタイムに散布されるデジタル情報は、脳から深い思考を剥奪して、単線回路に墮落させてはいないか。ITは、社会学的には、デジタルデバイドとアナーキーの二面から来る危険性と、その効率性、多極分散性から、新たな「ひと」育ての可能性をもつ、二義的な存在であると思われるがどうか。
- 我が国の特殊事情としては、クォリティーペーパーが難しい状況がある。多くの国で知識人向けのブロードシートと大衆向けのタブロイドの棲み分けがあるが、我が国の主要紙は200-1000万部であり、これを維持しながら、高級誌を目指すのは構造的に困難。部数は宅配制度で苦しいながらも維持され、横並び文化は、特落ちの不安から記者達を夜討朝駆に駆り立て、他方で、誤報の、これに対するピアプレッシャー、デシプリンの弱さを露呈することがあるのでないか。
- 今春の放送メディア買収にかかる茶番は、背後で、国際的資本系列化（マードック現象）や、放送と通信の融合といった問題を孕んでいた。ほりえもんには関心はないが、この環境変化にどう対応していくのか。これは、私が郵政予算主査だった時から悩ましい問題であった。
- メディアにおける技術革新と情報公開の動きは、政府や企業から情報・検討における相対的先行性を奪い、他方で、防戦を迫られる機会が増大し、悩ましい。第4の権力として誤った方向にいくと、危険な存在とならないか。教育においても、社会構造の変化と技術革新に着目して「脱学校社会」（イリイチ）を唱導する動きもあるが、現実的なのだろうか。
- こういった各フォーラムに跨るパースペクティヴは他にも多々あるが、それぞれのフォーラムで議論して頂いても良いし、月例会、分科会等において何らかの形で扱って頂いても良いだろう。

## 7. [結語]

答えが出ないと申し上げた。発表会では、勿論、17年度研究会各フォーラムの威信をかけて、立派な報告を期待するが、結論は容易でない。寧ろ、真摯な議論のプロセスを楽しんで頂き、その過程で、生涯の友人という財産を築き上げて頂きたい。また、問題意識を明確化するために踏み込んで記したが、勿論、これは議論の方向を先取りするものでなく、全く異なる方向の報告になっても、一向に構わない。是非、自由闊達に談論風発頂きたい。

それでは、1年間、仲良く楽しく頑張りましょう！ 神田真人 拜